

長崎県のある高校の国語教師のフェイスブックの記事より

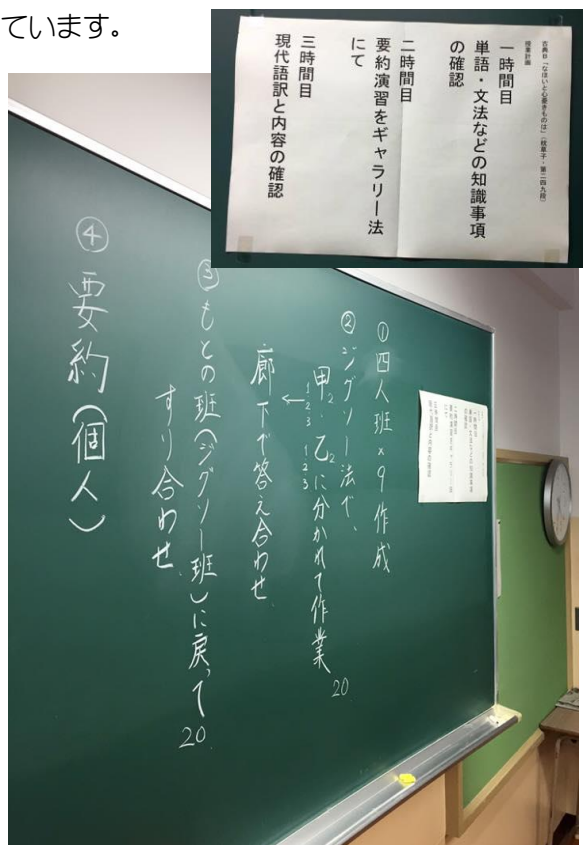
毎年3年生をやっている自分が、高校最後の教材としていつも持ってくるのが、『枕草子』(第 249 段)「世の中になほいと心憂きものは」です。

人間が苦しむのはいつも人間関係において。それを 1000 年前の清少納言が語っていました。「いったいどんな物好きが、自分は人に嫌われようなどと思うだろうか。」と言いつつ、「それでも、親子兄弟宮仕えのなかでも愛される人と愛されない人がどうしても出てきてしまう。なんと辛く苦しいことだろう。」と、続けます。自分はこれを初めて読んだ時、何か救われるような思いがしたものです。人に嫌われたり拒絶されるとき、どうしても問題を自分の中に探し、自分を責めてしまう自分。でも、これを読むと人間はもう 1000 年も同じことを繰り返しているとわかる。これはもう、人間の定め、業のようなもので、あなた一人が悪いんじゃないよ、みんなそうなんだよ、もう仕方ないんだよと清少納言に言われた気がしました。そして最後に、「人に愛されることほど素晴らしいことはあるまい」としめくくる。

生徒たちには、人を愛し大切にできる人間になって欲しい。お金や時間などかけなくても人に最高の贈り物をするので、ということとを古典から学んで欲しい。という意図でこれを最後にやるわけです。

生徒たちはともすれば高校古典なんて人生において何の役にも立たない、意味のない勉強だと思いながら、「あり、をり、はべり、…」とか覚え込まされた者も多いのではないだろうか。そのまま卒業して欲しくない。古典には人生の知恵、教養が詰まっています、むしろこんなに生きる知恵を与えてくれる学問などないことを知ってから卒業させたい。それが3年生の古典を担当するものの責務だと思っています。

というわけでアクティブラーニングの実践。目新しいことは何もできず、若干手詰まり感のあるこの頃ですが、ジグソー法で単語と助動詞を調べさせて、廊下に張り出した解答で答え合わせからの、次回の授業で行うギャラリー法につなげるための個人要約演習。アクティブラーニングで授業を行う際に、最後、いかに団体活動を個人に落とし込むか、が大事だと考えています。フリーライダー化させないためにも、全体⇒班⇒ペア⇒個人みたいなサイズ感を持って、どのサイズの活動をどこに配置するか？の見極めを適切に行うことの大切さ。今日はいつも消極的な生徒も最後の10分間要約の手を動かして始めてくれたので、やや成長を感じました。



- 彼のスレッドにあなたはどんなコメントを書きますか。
- 彼の投稿からアクティブラーニングのエッセンスを見出だしてみよう。